

---

# ハッピーなエンド。

一柳 紘哉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハッピーなエンド。

### 【Zコード】

Z5496A

### 【作者名】

一柳 紘哉

### 【あらすじ】

回覧板を矢島さんの家に届けることになつた僕。そこから巻き込まれた不思議な事についての話さ。

矢嶋さんの家に回覧板を回すのは小学校のころから僕の役目だつたんだよ。

だから、今回起じたこの出来事について何か言えるわけでもないことはわかつてはいるんだけど、どうもなんだか腑に落ちないんだ。妹に行かせればよかつたとも思うし、たつた一分。そう一分でも時間をすらせば僕はこんな混乱しなかつたと思う。多分ね。

回覧板を持つていって。と母に言われたあの時の僕はどうも浮かれていて、世界が薔薇色で、夢でも見てるんじゃないかと思つたぐらいなんだ。だから一つ返事で、いいよ。と言つてしまつたんだ。今はもう本当に後悔してるけどね。

もちろん回覧板を持つて行く事が浮かれた原因じゃない。誰しがそくなように僕だつてそんな面倒なことはしたくないと思つてるよ。浮かれた原因はね学校で少しだけいい事があったのさ。

でも、その話はこの話には関係がない。別に内緒にしてるわけじゃないんだ。ただ本当に関係がないだけさ。誰だつて関係ない話なんて聞きたくないだろ? 少なくとも僕は聞きたくないね、ましてや幸せな話なんて水洗便所できれいさっぱり流してしまいたいぐらいさ。だから話さないだけだよ、わかつてくれるだろ?

話がそれちゃつたな、まあとりあえず僕は浮かれていて、回覧板を矢嶋さんの家に持つて行つたことからこの話は始まつたんだ。

僕の家から矢嶋さんの家はそんなに遠くない。歩いて三分ぐらいなんだ。まああたりまえだよね、大体回覧板つていつものは町内で回すものなんだから。

僕は走つて矢嶋さんの家に行つた。まあ一分もからなかつたと思う。黒豹もびっくりするぐらいの速さで矢嶋さんの家についたんだ。

なんて馬鹿なことをしたんだろうと今は猛烈に反省してるよ。歩だ。

いていけばあんな事に巻き込まれなかつたんだろうからさ。本当にあの時の僕は頭のネジが一本ぐらいはぶつ飛んでたね。今、もし過去に戻れるなら、僕は間違なく僕をぶん殴つてるよ。

そんな馬鹿な僕は呼び鈴を押したんだ。ピンポーンってまるで呆れるような簡単な音がなつて、庭にいるポチがほえたんだ。ポチつていうのは矢嶋さんが飼つている犬なんだ。これがまた厄介なやつで僕は小さなころお尻を噛まれた事があるんだよ。だから今でもやつを見るとお尻の辺りがぞわぞわするんだ。

ポチは狂つたよう吼えてるけど、家の中から誰も出てくれなかつたんだ。ちょうど携帯にメールが来てたから返信した。時間は四時四分だつた。

いくら待つても出てこないから留守なのかなとも思つたけど、もう一度呼び鈴を鳴らしちゃつたんだ。

ピンポーンつてまた呆れた音が鳴つたと思つたら、後ろからトントンと肩をたたかれた。振り向くと地元の中学生服を着た男の子がいたんだ。矢嶋さんの家の長男の修一君かなと思つたんだけど、おかしいんだ、その子は祭りとかで売つてる安いウサギの仮面をかぶつっていたんだよ。修一君はウサギが嫌いなはずだから彼がこんな仮面かぶるはずないよね。

おかしいなとは思つたけど尋ねたんだ。

「修一君？」

つて。彼は僕の投げかけた質問なんて聞こえてないかのように何にもいわずに僕の横を通つて矢嶋さんの家のドアを開けたんだ。

ウサギの彼はドアノブに手をあてたままハツと何かに気がついたかのようにいきなり、本当にいきなり振り返つて僕の目の前に詰め寄つてきたんだ。僕はとても驚いてしまつてお尻の穴がキュつて閉まるのを感じたよ。

ウサギの彼は僕の目の前、本当に田の前に詰め寄つてきて、僕の

持つてゐる回覧板を指差したのさ。そのときの僕はまだ目の前のウサギの彼が修一君だと心の隅で思つていて、僕は彼に回覧板を渡してしまつたんだ。

ウサギの彼は回覧板を開いた。僕はもう役目、用事も終わつた事だし、別れの挨拶をして帰ろうと手を上げた時、ウサギの彼が回覧板の間からとつても立派な大きなナイフを取り出したんだ。ナイフは何でも切れそうなほどに鋭そうで、金属だけが持つてゐるあの輝きがとつても鈍く光を反射していた。そしてウサギの彼はゆつくりと僕の首筋にそのナイフを持つていつたんだ。

「コーヒー出すからさ、あがつていけよ

とつても低い声でウサギの彼が僕にこいつ言ったんだ。修一君の声変わりもまだな、あのあどけない声とはかけ離れていた、どちらかといえば人を齧すような声だつたんだ。

おとなしく従わなきやいけない。どうにか刺激しないように。それが僕の出した答えだつたんだ。恐かったんだ。ナイフを突きつけられた瞬間に僕の体の毛穴は開ききつてしまつた。じわつと本当に気持ちが悪い汗が全身からただれ出てくるのを感じたよ。首もとの一本の細い線のよくな冷たさだけが生きた僕の体みたいだつた。

ウサギの彼は僕の背中にゆつくりと回つて、僕を蹴り飛ばした。僕の体は体勢を崩して玄関のドアにぶつかつたんだ。それはもう惨めに。

「開けろよ」

ウサギの彼がそつとつた。僕は抵抗なんかしないでさつとドアを開けたのさ。そうしたら、ナイフを手でクルクルと愉快そうに回しながらウサギの彼は言つたんだ。

「靴脱いで、居間に行け。コーヒー持つてってやるから」

僕は靴をぬいで、冷蔵庫の中のような冷えた廊下を進んで居間に行つた。矢嶋さんの家には何回か入つたこともあるしもちろん迷うことなんてなく一目散に居間に行つた。

居間には大きなテレビ、クリーム色のソファーセット、ガラスのテーブル、僕の腰の高さまである観葉植物、窓の近くに縄で縛られた矢嶋修一君、鹿の剥製のように上半身だけ壁から突き出た修一君のお母さんの矢嶋紀子さんがいた。気がおかしくなりそうな頭を抱えてヨチヨチと歩き、僕がいくら揺さぶっても目は開けてくれなかつた。それどころかなんだか幸せそうな寝顔をしていたんだ。

修一君の肩を揺さぶりながら、ふと視線を上げると紀子さんの姿が消えていた。変わりにとても大きなリスの剥製になつていたんだよ。リスじゃないかと思うくらい、熊ぐらい大きいんだ。まさにドングリをかじりうつとする瞬間の剥製でね、ドングリの大きさはそちら辺に落ちてるドングリと変わつてないからなんだか可笑しさがこみ上げてくるんだ。

とりあえず修一君の縄をとこうと思つて僕は力を入れたんだ。

「何してんだ、そんな事してないでコーヒー飲めよ、冷めるぞ」

ウサギの彼がソファーにくつろぎながら僕を呼んだんだ。ナイフをちらつかせながらね。僕はウサギの彼に行動、つまり修一君の縄をはずそうとしている事を咎められるんじゃないかと思ってビクッと体を振るわせた。でもウサギの彼はそんな事氣にも留めなかつた。そんなことよりも多分彼はただ単純にコーヒーの味の事だけを気にしていたと思う。

僕はウサギの彼のナイフが恐くてたまらなかつたから修一君を優しく、本当に優しくね床に寝かせてソファーに腰掛けたんだ。

「飲めよ」

と、彼が僕の前にマグカップを置いた。すつと鼻に通つていく穏やかな香りが張り詰めて僕の緊張みたいなものを少しだけ緩めてくれた気がする。口に含んだらいやにまともな味がして少し驚いたんだ。酸味が利いたいい味だつたな。

ウサギの彼は僕に、美味しいか？と尋ねてきた。僕は美味しいです。と幾分強ばつて言つた。多分声も裏返つていていたと思う。

ウサギの彼はとても満足そうにうなずいた。そして部屋の中は静かになつた。誰も何にも言わないんだ。僕も修一君も、ウサギの彼も。雪の日のような静けさがこの部屋を支配していたと思つ。彼は唐突に言つた。

「君がよければ食べさせたいものがあるんだけど、食べる？」

僕は恐る恐る言つた「いや、コーヒーだけです……十分です」

「食えよ」

ナイフが不自然に光つたんだ。僕の心臓はノミよりも小さくなつて、太鼓よりも大きな音を奏でた。口の中にたまつた唾液を飲み込みこんで言い直した。

「あつ……はい。頂きます」

ついて來い。と言ふウサギの彼は立ち上がつた。僕は彼に近づきすぎないように四、五歩離れて廊下に出た。

でも、廊下は廊下じゃなくなつていて。僕の知つてゐる矢嶋さん家の廊下じゃなくて、どこだか解らない学校の夕暮れの保健室にな

つていた。

つんと鼻を刺す独特のにおい。クラクラとなつた。僕はね保健室にはそんなにいい思いではないんだ。で、ここでやつと馬鹿な僕はやつときずいたんだ。異常だつて。なんだか訳の解らない事になつているつて。頭をかきむしりながら気がついたんだ。やつとね。

混乱してゐる僕を尻目に、清潔そうな真つ白いシーツのベッドの上にウサギの彼は立ち、ぱちんと指を鳴らしたら真つ暗になつた。何にも見えない本当の暗闇が訪れたんだ。

どこからか、パン。と音が聞こえたかと思つと部屋が急に明るくなつた。眩しくて目をつぶつた。一、三秒たつてゆっくり目を開けると、君の家のキッチンにいた。そう。君のね。

キッチンの片隅に足をグルグルと繩で縛られた豚がいた。豚はどこか滑稽でね、どつか遠くお見つめながらブヒブヒ思い出したように鳴いていた。

ウサギの彼は冷蔵庫から肉の塊を出して、手に持つたナイフで切り落とし、塩コショウで下味おつけて、フライパンで丁寧に焼いた。手際がいいと思つた。ウサギの彼は君の家のキッチンをよく理解してたよ。

彼は真つ白な皿にフライパンで焼かれた肉を盛り付けて、小さな小皿に塩を盛つた。ナイフとホークを取り出して皿に乗せた。

「食べろよ、ポークステーキだ」

振り向いてウサギの彼が僕に言つた。部屋の片隅で豚がブヒブヒと鳴いた。

僕はナイフで一口大に切つて、塩をつけた。ちらりと彼のほうを盗み見たら満足そうにうなずいた。

ポークステーキを口に含んだ瞬間僕は言つた「美味しい」と。

そう言つてウサギの彼の御機嫌をとつたわけじゃなくて、本当にただ単純に美味しかつた。舌を刺激する肉汁が口の中に広がり、と

めどなく出てくる唾液と混ざり合い、滑らかな歯ざわりの肉は纖維がつまっていた。今でもあれだけはもう一度食べたいと本気で言えるよ。あんな美味しいポークステーキは食べたことなかつた。

食べ終わり、彼に食器を返した。

「それでいいのかい？」

と、本当に突然ウサギの彼が言つたんだ。質問の意味が解らなかつた。でも彼はもう一度言つた。

「本当にそれでいいのかい？」

「なにがですか？」と僕がやつぱり意味が解らなかつたから一瞬えきれずに言つた。

「はっ。少しさは考えるよ。自問自答してみるよ。お前はいつもそうだな、自分で考えて行動したことあるのか？周りに流されて、気持ちがいい誰かが言つた真実を振りかざして、生きる価値があるとでも思つてゐるのか？情けないしみつともない。俺はお前みたいにスポーツをされて生きているやつは我慢できないんだよ」

そう言つたウサギの彼はナイフを振りかざして僕に迫つてきた。だから僕は逃げた。真剣に。

全力で走つた。少しでも振り返つちゃいけないと思つた。もし振り返つちゃつたら僕はウサギの彼に何度もナイフで刺されるだろう。それは無残に。僕の形がなくなるまで、指の一本でさえも百の肉片になるまで切り刻まれるだろうと感じたんだ。

悪い。どこをどう走つて逃げたのかは覚えてないんだ。本当に必死で、必死で目の前の道を突き進むことしかできなかつたんだ。でもこれだけは覚えてる。蛇のような道だつたんだ。

その蛇のような道を走った。息はあがり、足はもつれて、何度も諦めそうになつた。いつそウサギの彼に捕まつてバラバラになつたほうが楽になるんじやないかと思つぐらい走り抜けたんだ。

足がもつれて転んだときに目の前に大きな扉が見えた。焦げたような茶色の木でできた扉で。ドアノブは金色で、ところどころ剥げていた。そして、凄い勢いで足音が近づいてくるのがわかつた。僕は火事場の馬鹿力みたいなものをだして立ち上がり、扉まで走つた。

扉に手をかけドアノブを回そうとしたら服の襟を捕まれたんだ。とんでもない力で後ろに引っ張られた。もう終わつたと思った。その瞬間なんていうのか諦めたんだよ。

でも、扉は手前に開いてくれた。バランスを崩したウサギの彼は後ろに倒れた。僕はドアノブに捕まつていたからバランスをくづしても何とか持ちこたえられたんだ。奇跡、いや神様って思ったよ。僕は倒れこむように扉の向こうに行つて、ドアを閉めようとした。ウサギの彼は僕にこう怒鳴つた。

「諦めないからな。忘れるなよ、俺はどこにでもいるからな。逃げ切れたと思うなよ。どこにでもいるんだからな」

僕は扉を閉めた。そして座り込んだ。全身から力が抜けていつて、どうしようもなく眠くなつたんだ。何とか抵抗しようと思つたんだけどダメだった。湖いっぱいが砂糖水になつたようなトロリとした眠気が僕に抵抗を許さなかつたんだよ。そして僕は夢を見た。

ショーウィンドウの前で僕はマネキンを見ていた。

ガラスの中のマネキンは綺麗な真っ赤なドレスを着ていた。血のよみが色のそれはこの夢の中で唯一色があつた。

マネキンは重そうな口を開いて僕に言つた。

「どうも有難う。大変面白かったでしょ？」

僕は反論しようとしたが、口を開こうとするが動かなかった。それどころか体もぜんぜん動かないんだ。腰に手を当てた格好でピクリともね。ガラスに映った自分の姿を見て気がついた。僕がマネキンになっていた。

赤いドレスのマネキンは言う「さて今回の代金なんですが、どうしましようねえ……あんまり高価なものをもらつても悪い気がしますし……そうですねえあなたの必要なものを頂く事にしましょう」

それがいいわ。それがいいわ。と赤いマネキンは言い続けた。  
それがいいわ。それがいいわ。それがいいわ。それいいわ。

気がついたら矢嶋さんの家の前に立っていた。ポチはあいかわらずけたたましく吠えていた。

僕は携帯を取り出した。この、おかしな事を誰かに聞いたかったから。それに矢嶋さんの家の中には縄で縛られた修二君とどこかに消えた紀子さんがいるから警察に連絡もしなくちゃいけないとも思つたんだ。

携帯の液晶を見たときに変だと思った。四時四分だつたんだよ。メールが来ていた。そのメールに僕は確かに返信したはずなのに、僕は返信してなかつた。発信履歴には残つてなかつたんだ。

そして気がついたら叫んでたんだ。分けの分からぬ言葉にならない言葉を。僕の叫ぶ声にびっくりしたのか矢嶋さんの家から紀子さんが出でてきた。

「何? どうしたの?」

どうしたの? 何があつたの? ハハハ僕に分かるわけないじゃない

ですか。今でも分からぬよ、この出来事は夢で片付けられるほど簡単なものでもなかつたし、なにぶん現実感がありすぎたんだ。

とりあえず僕は紀子さんに回覧板を渡した。紀子さんは、ねえひどい顔してるけど本当に何が会つたの大丈夫なの?と繰り返し聞いてくる。僕は頼りない、井戸のそこから叫ぶよつこ、大丈夫。と繰り返し言つた。もちろん僕と紀子さんにむけてね。

紀子さんは言つ。

「家に上がつていきなさいよ、ほんとにひどい顔してるよ。コーヒーでも飲んで落ち着きなさい」

「コーヒー?

そういうわれた瞬間に僕は走つて逃げたんだ。何にも考えずに逃げた。

家に帰り、急いで自分の部屋に閉じこもつた。階段にぶつけた足が少し痛んだ。鍵を閉めて、毛布にくるまつた。それでも僕の心臓は落ち着かないし、なぜかとてもイライラした。

本棚の裏に隠してあるガンチャに手を伸ばして火をつけた。ゆっくり吸つて、ため息のよつよつに吐き出した。

沢山吸いこめ、頭を搔き籠れ。

どこからかこんな声も聞こえてきた。ガンチャを吸つてるときに誰だかわからない人の声が聞こえてくることは今までにはなかつたんだよ。それについて少し混乱はしたけど、なぜだか落ち着いた。

そしてね、やつと僕の体に異変があることに気がついたのさ。

僕はやつと落ち着いて自分の手の平を眺めた。汗でびしょびしょにぬれていた。毛布で汗をぬぐつて、煙を吐き出し、手の甲を眺めた。

右手の爪が全部綺麗に無くなっていた。

マネキンの言葉を思い出した。“代金はあなたの必要なものをもうらつていきます”

全身の毛穴がぽつかり開いて、穴という穴のすべてから僕は叫んだのさ。近所迷惑も考えずにね。

だから僕はあれからいつも右手に手袋をはめてるんだ。右手の爪がないというのは本当に不便でね物をつかもうとしてもつかめないし、周りの人からおかしな目で見られるんだ。いいかげんにしてほしいよ、まったく。

でもそんな僕にも救うべき物事はある。

好きな子がいてね。その子が僕に愛の告白をしてくれたのさ。

だからね僕は、今は幸せなのさ。

浮かれてるなんて言わないでよな、水洗便所で流してもいいから

(後書き)

読んで頂きありがとうございます。今回のモノはなんだか本当にドタバタしました。でも、こうするしかなかつたのです。言い訳ですけどね。少しでも読んでくれた人に何かが伝わればと思います、ね。とにかく本当にこんなとこまで読んでくれてありがとうございます。嬉しいです。

P.S. 次回のモノは僕にとつて少しだけ意味があつて、まあ記念だとおもつてます。そちらのほうもよろしければ見ていただきたいです。それでは、又。ピース。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5496a/>

---

ハッピーなエンド。

2010年12月24日03時06分発行